

<ワン・ポイント・レクチャー> “いのち”を紡ぐコース

第5回：生・死学事始め①—誰もがホッとできる終焉を迎えるために

鎌倉時代の随筆家の吉田兼好(兼好法師)は『徒然草』155段で、「生・老・病・死の移り来ること、また、これに過ぎたり。四季はなほ定まれるついであり、死期はついでを待たず。死は前よりしも来らず、かねて後ろに迫れり。人、皆、死あることを知りて待つこと、しかも急ならざるに、覚えずして来る。沖の干潟遥かなれども、磯の潮の満ちるが如し。」と書いています。つまり、生まれる、歳をとる、病気になる、死ぬというのは順を追ってやってくるものの、引いている潮がいつの間にか満ちるように、“死”を迎える時期なんていつ来るか分からない。いつの間にか後ろに迫っているものだと言っています。また、よく誤解されています吉田定朝の『葉隠』には「武士道とは死ぬことと見つけたり」とあります。これは、「武士はいつ何時死ななければならない時が来るか分からないので、常に、健康を第一にし、日々、“やるべきこと”をキッチリとやっておくように精進をすべきだ」という意味なんです。

ターミナル・ケア(終末期医療)の領域で、「不平不満を言いながら生きてきた人は、不平不満を言いながら死んでいく。人に頼りながら生きてきた人は、人に頼りながら死んでいく」ということを耳にします。しかし、挫折と回復との繰り返しを辿りながらも、日々を大切にしながら一所懸命に生きようとしてきたひとは、その人生の最終段階において「最後の跳躍」＝「最期の成長」を見せることがあります。

ホッとできる終焉を迎えるには、日々、どのような些細なことであっても手を抜かず、結果にばかり囚われることなく、自分を“力”や存在価値を信じ、自分にとって大切な「人」との関わりを一層深め、日々の生活を送る上で「欠くことが出来ない“もの”や信念など」を手放さず、日常生活、社会生活で当たり前のように出来ている「行動」が当たり前に出てくることのありがたさをかみしめながら日々を生きることこそが、その秘訣と言えるのではないのでしょうか。